兵庫教育大学　研究紀要　第41巻　2012年９月　pp.111－119

インド・ムスリム女性の教育と家庭生活
―北ケララ調査（2010）より―

Muslim Women's Education and Family Life in India: A Fieldwork in North Kerala in 2010

服　部　範　子*
HATTORI Noriko

インドでは近年、教育政策が積極的に推進されている。このような状況下で、ムスリム女性の教育が遅れていることが問題視されている。そこで本稿では、インドの教育先進州とされるケララ州において、イスラム教徒の女子教育や結婚・家庭生活について、若干の検討を試みる。

ケララ州を南北に分けると、北ケララにはイスラム教徒が多く居住し、南よりも教育が遅れ貧しい傾向がある。しかし、近年、外国に出稼ぎに行く人々も増え、教育の重要性が認識されつつある。男性であれば高年齢から若年層まで高等教育を受けている家庭でも、女性がベールをかぶらないで外出でき、男性と同等レベルの教育を受けるようになったのは、つい最近のことである。

北ケララのイスラム教徒の結婚・家庭生活は、ケララ・ナヤールの結婚・家庭生活であった母系制大家族で婿入り婚を模倣し、女性は家庭に留まって日常生活をしてきた。しかし、最近、人々の生活は徐々に変化しつつあるが、若年層の高等教育を受けた女性も、結婚後は家庭に入るのが一般的である。

キーワード：女子教育　イスラム教徒　家庭生活　インド
Key words：women's education, Muslim, family life, India

１　序論

１）　宗教別にみたインドの教育

インドは宗教、文化、民族、貧富差など多様な国であるが、人々の生活は近年、急激に変わってきている。しかし、インドを世界的にみると依然として全体的に貧困で教育が遅れており、その解決が国の重要課題とされている。教育については、すべての人が識字・初等教育を受けるという目標を達成するために、学校給食のサービス・授業料無料・教科書の無償配布・通学のための自転車の貸与などの教育推進策が実施されている。2000年代に入ると農村部では非識字の成人女性などを対象にした識字教育が実施されている。

インドの教育状況について、2001年に実施された国勢調査によると、インド全体の識字率は64.8％で、男性75.8％、女性53.7％である[1)]。インドではヒンドゥー教、シーク教徒、仏教、キリスト教など多様な宗教が信じられているが、ヒンドゥー教徒が約８割を占めて最も多い。教育について宗教別にみると、識字率はイスラム教徒が59.1％で最も低く、イスラム教徒の女性の識字率は50.1％（男性は67.7％）と最も低い（表１参照）。就学状況について都市部と農村部という地域別に分けてみると、どの宗教でも都市部より農村部が遅れている傾向はみられる。しかし、農村部におけるイスラム教徒の教育について性別にみると、男性は非識字38.6％と就学前レベル25.1％を合わせて63.7％であるのに対し、女性は非識字57.9％、就学前レベル19.1％で、両方を合わせると77.0％となり、ムスリム女性の教育レベルの低さは際立っている[2)]。指定カースト、指定部族などよりも、イスラム教徒女性の教育レベルは低いと問題視されるようになった。

表１　インドにおける主要宗教別識字率

宗教	男性	女性	計
ヒンドゥー教（Hindus）	76.16	53.21	65.09
イスラム教（Muslims）	67.66	50.09	59.13
キリスト教（Christians）	84.37	76.19	80.25
シーク教（Sikhs）	75.23	63.09	69.45
仏教（Buddhists）	83.13	61.69	72.66
ジャイナ教（Jains）	97.41	90.58	94.08

GPI: Gender Parity Index (Female literacy divided by male literacy, then multiplied by 100). *Source*: Census of India, 2001. Zoya Hasan & Ritu Menon 2005 "Educating Muslim Girls: A Comparison of Five Indian Cities" Women Unlimited

このような状況下において、インドではイスラム教徒の女子教育について調査研究が実施された。この調査地点としては以下の５都市が選定され教育状況が論じられている。

５調査地は、まずは首都デリー（Delhi）である。ここにはインドでイスラム女子のため最初の学校がつくら

＊兵庫教育大学大学院教育内容・方法開発専攻行動開発系教育コース
平成24年４月20日受理

れた。次にアリガール（Aligarh, Uttar Pradesh）で、インドでは貧しい州で全体的に遅れているが、この地は20世紀前半にイスラム女子を教育する運動の最前線であった。強大なイスラム藩王国が続いてきたハイデラバード（Hyderabad, Andhra Pradesh）では、イスラムにより女子教育への投資がなされてきた。カルカッタ（Calcutta, West Bengal）はインドでは古くからイスラム女子のための学校がつくられ政治的にも進歩的な州である。そして、ケララ州のカリカット（Calicut, Kerala）である。ケララ州で最初のムスリム女子のための私立学校ができたのはインド独立後の1950年代のことで、インド全体でみると大変、遅い。しかし、その後の州全体での教育に対する先進的な取組みが追い風となり、現在では進んでいると指摘されている[3)]。

さて、私はこれまでイスラム教を信じる女性の教育や家庭生活について、中国の新疆ウイグル自治区の少数民族ウイグル族と、それと比較検討するため、地理的にはすぐ近くに位置するイスラム教を国教とするパキスタンにおいて現地調査を実施した。イスラム圏では女性を社会的に隔離する「パルダ」により、女性の教育や仕事・社会参加などが男性よりも遅れている傾向がある。パキスタンでは都市部でも宗教的な理由により、女子教育が男性よりも著しく遅れ、女性の日常生活や行動は男性よりかなり制限されていた。ところが、新疆では中国の国家政策の一環として女子教育の推進など、女子への優遇政策が実施されている。男女の社会的役割は多様であること、国の政策によって可変であること、とりわけ中国において、ジェンダーの変化するスピードの速さに驚かされた[4)]。

本研究では、ケララ州のイスラム女性の教育や家庭生活の現状について現地調査の結果に基づき若干の分析を試みる。

2．ケララ州の宗教に着目した教育

インド南西端に位置するケララ州はインドの中で教育・保健医療などが最も優れ、女性の社会的地位が高い州とみなされている。たとえば、一例として識字率をみると、前述のようにインド全体では64.8％であるが、ケララ州では92.9％である[5)]。私たちはこのケララ州において、2009年８月に現地調査を実施し教育の現状についてまとめた[6)]。この州の教育事情についての現地調査は、主としてコーチン（Cochin）と、南部のコッタヤム（Kottayam）などで実施した。確かにこの州では教育関係者のみでなく行政や親たちも教育熱心で、都市部では高等教育レベルの教育が普及していた。州内において山間部、また原住民、指定部族、指定カースト、少数部族などの教育は遅れているが、それに対する取組みが近年、推進されている。私たちは農村部の小学校での取組みや、成人女性の識字教室などについても訪問調査を実施した。

さて、ケララ州はインドでは面積の小さなマラバール海岸に面した南北に細長い州であるが、人々の生活には地域差や宗教差などが見られる。すなわち、ケララ州は歴史的には政治・行政的には大きく３つに分けられる。南のトリヴァンコール藩王国（Travancore）、中部のトリシュール（Thrissur）までを含むコーチン藩王国（Cochin）、そして、北部のマラバール（Malabar）である[7)]。ケララは現在、コーチンを中央部として、大きく北部と南部とに分けて考えることが可能であり、一般的には北ケララと南ケララと呼ばれる。

ケララ州を宗教的にみると、全体的にはヒンドゥー教徒が多い。その他の宗教としては、北ケララにはイスラム教徒が、南ケララにはキリスト教徒が多く居住している。

ケララ州で教育などが進んでいる点や、独立後、共産党政権が樹立された背景として、伊藤正二氏は、ケララに19世紀後半から起こってきたヒンドゥー教の宗教社会改革運動について考察している[8)]。その他にケララ州が古くからインドの中でも文化・教育が進んだ州である一因には、キリスト教徒が多く、キリスト教の影響を強く受けたことが挙げられる。ケララ州の中部から南部にかけては、キリスト教徒が多い。またヨーロッパなどに出稼ぎに行った人が多く、豊かになった人々は欧米式の住宅に住み欧米風の生活様式をしている。私たちが2009年に調査を実施したのは、コーチンから南ケララの地域である。

・ケララのイスラム教徒

北ケララにはイスラム教徒が多いが、インド・ケララ州のイスラム教徒には大きく２タイプがある。まずは、インドに古くからいるイスラム教徒である。コーチンの少し北のコデュンガロ（Kodungallor）には、イスラム教が７世紀に誕生したとほぼ同時期にチェラマン・モスク（Cheraman Juman Masjid, Cheraman Mosque）がつくられた。これはインド最古のモスクとされ、現在、この地は「インドのメッカ」と呼ばれている（写真１）。

写真１　チェラマン・モスク（ケララ　2010）

もう一つのタイプは、海外から渡来した人々である。ケララのマラバール海岸線沿いは、古くからヨーロッパとアジアとを結ぶ世界的な規模での物・人の相互交流がなされてきた。そのため、ケララには海外からさまざまな人々が渡来してきた。その中に中東からの人々もおり、イスラム教徒も多く定住した。この地ではインドのグジャラート（Gujarat）など他地域から200～300年前、商人としてケララに移住してきたヒンドゥー教徒たちもイスラム教に改宗した人々が多いそうである。

北ケララはイスラム教徒が多く、産業の発達や教育などが全般的に遅れている状況が続いている。そこで、本研究では、ムスリム女性の教育状況や結婚・家庭生活の現状について、現地調査を2010年８月３日～12日に実施した。調査地は図１の通りで、北ケララのカヌール（Kannur）県のカヌール（Kannur）とタルセリ（Thalassery）、コジコーデ（Kozhikode）県のコジコーデ（Kozhikode）、そして、ケララ中部のエルナクラム（Ernakulum）県、コーチン（Cochin）である。

図１　ケララ州の県別地図
（○印は調査を実施した県）
http://www.thisismyindia.com

３．ケララ州のムスリム女性の教育について

１）　ケララ・イスラム教徒の教育の歴史

まずは、前述の『インドのムスリム女性の教育』において、ケララ州のカリカット（Calicut）について論じられている内容を要約する[9]。

コジコーデ（Kozhikode）（旧名カリカット）近くのカッパド海岸（Kappad Beach）はポルトガル人のバスコ・ダ・ガマ（Vasco da Gama）が1498年にインドに最初に上陸した地である。このあたりのクチチラ（Kuttichira）にはミスカル・モスク（Miskhal Mosque）があり、その周辺には海外から来たイスラム教徒が多く住んでいる（写真２）。

写真２　ミスカル・モスク近くのベールの女性
（ケララ　2010）

本書によると、ケララ州では1920年代にムスリム改革運動が起こり、マドラサ（イスラム宗教学校）やコーランの学校に女性も通うようになった。しかし、独立後の1950年代に、ムスリム教育協会（Muslim Education Society）はカリカットでやっと女子教育を始めようと動き始めた。

この調査学校の生徒のうち95％はイスラム教徒である。女性を社会的に隔離するパルダの慣習は強制的ではなく任意な地域ではあるが、通学のため乗物を利用している。ムスリム女性は早婚であるため、結婚のため女子生徒の20％は中退している。

この地域で女子教育を阻害している大きな要因としては、早婚のほか、貧困、宗教的な理由、親が娘に教育を望まないことなどが挙げられる。親自身も教育を受けていないため、親の教育に対する意識が低い。そこで、学校で給食サービスをし、教科書や制服、傘の無償配布をし、結婚すれば学校は中退していたが、結婚後も就学を促進するように働きかけをしている。

ケララ州ではインド独立後、州全体で積極的に教育が推進されてきた。その一環としてイスラム教徒は男女とも（特に女子は）就学率が低いこと、また公務員などで働く人数が著しく少ないことが問題にされた。そして、

イスラム教徒も教育を受けることが重要だと、就学率を上げる試みが始められたと、本書では指摘されている。

独立以前のケララ州におけるイスラム教徒の教育について、前述のコデュンガロ（Kodungallor）のチェラマン・モスク（Cheraman Juman Masjid, Cheraman Mosque）の資料によると、1921年にマラバール改革運動（Malabar Rebellion）が起こり、1923年にはムスリムの教育運動が始まった。マドラサに教室に椅子や机や黒板を備え、すべての子どもに本や鉛筆を無償配布し、昼食を提供するなどの改革が行われた。その結果、この地域のムスリム女子の識字率はインド全体から見ても高く、この地域では女性の医者を多く輩出してきたという。これはコーチンから約20キロ北に位置するケララ中部でのことである。ケララ州内でもケララ中南部では、イスラム教徒もキリスト教徒やヒンドゥー教徒などと同等の教育がなされてきた。現在、イスラム教徒女性の教育が北ケララにおいて遅れていると問題視されている。

２）北ケララのイスラム教徒の教育について

カヌール（Kannur）在住のモハメッド・コヤマ（Mohamed Koyama）氏（マドラスの元大学教授）によると（写真３）、北ケララでは1942年に教育に女子が少ないのが問題になり、1951年に北ケララで最初の男女共学の学校がつくられた（この学校を訪問したので後述する。）。

イスラム地域では1965年に教育改革が実施され、イスラムの学校もつくられ、女性も学校に通うようになった。その社会的な背景・理由は、政府などの公務員に働くイスラム教徒が少ないこと、特に女性が少ないことが問題視された。そして、イスラム教徒の間でも男女ともに教育が必要であることや、男女とも働かねばならないと認識されるようになったことが挙げられる。北ケララではこの時期から、湾岸諸国に出稼ぎに行く人が増え始めた。このような社会経済的要因により、この地域でも教育が重要であるという認識が促進されたのである。

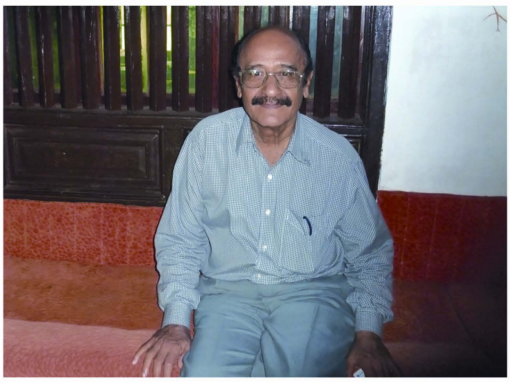

写真３　カヌールのモハメッド・コヤマ氏
（ケララ　2010）

私たちは北ケララ初の男女共学校であるM.M. 高等学校（M.M. Higher secondary school, Al-Madrasathul Mubaraka）を訪問した。この学校はタルセリ（Thalassery）にある。今は小さな町であるが、かつては丘陵部から香辛料、主にコショウが運ばれ、このあたりでは最大の貿易港として栄えていた。この高校は1951年に創設された最初から、男女共学の高校（high school）である（写真４）。

写真４
タルセリの高校生
（ケララ　2010）

この学校の前身は1928年にマドラサとして始まり、この地では歴史的に古い学校である。その後、インド独立運動のリーダーにより1936年に学校をつくろうという教育運動があり、1936年に小学校（lower primary school）となり、1942年に中学校（upper primary school）となった。

現在は政府が援助する学校（Aided School）となっており、学校名は高校のままであるが、2000年にプラス２（Plus Two）まで教えるようになった[10]。すなわち、ケララでは2010年から高校10クラスでの試験を廃止し、従来の高校でプラス２年、つまりカレッジ・レベルまでの教育が実施されている。この高校ではそれより早くプラス２レベルの教育がなされているのである。

学校長によると、この高校には、高校までは1700人、プラス２までの12年は360人、計2060人の学生が在籍している。生徒の90％はイスラム教徒で男女比は半々である。卒業後、90％以上が進学する。女性の進路を学部別にみると、工学部（engineering）が60％、医学部（medicine）その他で多いのは薬学、看護である。さて、私がこれまでインドで訪問した学校では、小学校から大学に至るまで学校長レベルの管理職の大半は女性であった。ところが、この学校の校長は男性で、女子教員の占める割合は28％にすぎず、インドとしてみれば女子教員比率が低かった。

３）ムスリム女性の教育に関する世代間変化

ケララのムスリム女性の教育について、世代間変化に

着目し事例的に検討する。聞取りしたのは３事例で、いわゆる上流階層や富裕層に限られている。

①　コーチンの印刷業を営む男性（60歳）（写真５）

父親80歳は８人きょうだいであるが、父親世代では男性は大学や大学院を出ているが、女性は全く学校には行っていない。次にこの男性世代についてみると、小・中学校に通った1950年代後半から1960年代に、学校は男女共学が一般的であった。しかし、教育レベルについては、男性は大学・大学院に行くが、女性は高校までが普通であった。彼の子ども世代は30歳代であるが、教育は男女とも大学・大学院に行くのが一般的である。しかし、女性の仕事は結婚までで、結婚すると仕事をやめて家庭に留まるのが一般的である。

写真５　コーチンのイスラム教徒の夫婦
（ケララ　2010）

②　カヌール県タルセリ（Thalassery）のファイザさん（Ms. Faiza Moosa，52歳）（写真６）

写真６
タルセリのファイザ・モーサさん　左は自宅
（ケララ　2010）

彼女の親世代では、男子は大学に進学しても、女子は学校に行かないのが普通であった。彼女の世代では、女子は10歳までの小学校には行けたが、それ以上には行けなかった。このような時代に、彼女はクリスチャンの女子大学に行き経済学専攻（現在は男女共学の大学になっている）である。彼女が大学に進学できたのは、祖父（現在70歳）が改革主義者であったためである。彼女のきょうだいは、この地域では例外的に学校に行き勉強することができたのだという。夫の妹（現在57歳）は、この地方で初めて大学に進学した女性であるが、大学卒業後は結婚して主婦になった。ファイザさんは結婚後、さらに大学院に進学してイスラムについて学んだ。現在は料理研究家として有名である。

③　カヌール（Kannur）のモハメッド・コヤマ氏(65歳)

マドラス（Madras）の元大学教授で英文学専攻。父親も英語の先生、６人きょうだいのうち、男性は自分ひとりで他の５人は女である。彼の子ども時代にイスラムの学校はなく、彼は高校（10クラス）まではキリスト教系の男子校に通った。この学校を卒業後、男子はさらに上級学校に進学するのが一般的であった。女子にもキリスト教系の高校（10クラス）があった。女子は中・高校を卒業すると結婚するのが一般的で、さらに進学する人はほとんどいなかった。現在は男子高、女子高ともプラス２まで教える政府援助の学校になっている。

以上を要約すると、現在50～60歳代の人々は、イスラム教を信じる人々もキリスト教系の学校に通ったと話している。ケララ州の教育を推進する上で、キリスト教の影響が強かったことがうかがえる。ケララ州のイスラム教徒は、男子は教育を受けても、女子はほとんど教育を受けなかったが、世代により急激に変わり、最近では男女とも同様に教育を受けるようになっている。プラス２は当り前となり、さらに大学・大学院まで進学する人が増えている。

ケララには地元に産業がないため、海外で仕事をする人が増えるにつれ、仕事をするには教育を受けることが重要であると認識されるようになってきた。しかし、海外で働くのは男性が多く、女子は結婚後、家族として一緒に行くこともあるが、自分の親と家庭に留まっていることが多い。

４．マラバール・イスラム教徒の結婚・家族

イスラム教徒の女性はどのような家庭生活や日常生活をしているのであろうか？

現地で民家訪問や女性への聞取り調査を実施した際、北ケララのイスラム教徒の家庭は、この地に古くから住むイスラム教徒のみでなく、外から来たイスラム教徒も、ヒンドゥー教のナヤール社会でなされてきた結婚・家族のあり方を模倣して続けていると、現地の人々が語っていた。前述のムハメッド・コヤマ氏によると、このような生活をしているのは、世界中のイスラム社会でマルバールのムスリムのみという。

そこで、本稿では、まずはナヤールについて論じた上で、2010年にイスラムの結婚・家族について民家訪問した調査結果について報告する。

1）ケララのナヤールの家族について

ケララのナヤール（Nayar）といえば、家族研究者の間では妻方住居へ男性が通う妻問婚をし、夫婦は同居して暮らさないことや、女性たちが結婚後も親元に留まる家族生活をし、家・土地などを母から娘へと女性が相続していく母系制の事例として世界的に有名である。

このようなナヤールの結婚・家族における母系制はインド独立後、法的には廃止され消滅したと報告されている[11)]。

2009年のケララ調査の際、名前にナヤールとある人々に出会い、コーチンでナヤールの家庭を訪問した。訪問した家庭では今は一つの敷地内に、老夫婦が同居して暮らし、妻の弟の家族が別棟で住んでいた。この夫婦には子どもが３人（男２人、女１人）おり、皆成人している。息子２人は仕事のため他州に住んでおり、年に１回戻ってくる程度である。１人娘は夫の社宅に住んでいたが、今は親たちと同居している（写真７）。

写真７　ナヤールの夫婦と娘
（ケララ　2009）

名前についてみると、男性は婿入り婚をするが、結婚後も名前は変わらない。子どもは母親の家を継ぎ、子どもの名前は、自分の名前の後に母親の家の名前を付ける。女子が複数いる場合、末娘に家の権利があり、家を継いで老親の世話もする。女が家を継ぐとしても、生まれてくる子どもの性別を選好するということはなく、女子がいない場合には養女を後継ぎにすることもできる。家以外の土地などの財産は男女が平等に相続するとのことである。

結婚は見合いで、インドではダウリーが大きな社会問題になっているが、ナヤールではダウリーはない。結婚式は女の家でし、女性が男性にターリ（Thali）という首飾りをつけてもらい、甘いものを食べ、花嫁方の父親が新婚カップルに手をつながせると、夫婦は手をつないだままで室内を３回まわるという簡単なものである。結婚式の費用は女性側がもち、男方の親族は式の後には男をおいて帰ってしまう。この家の娘の結婚式には自宅に男性側の親族など300～500人が訪れた。

日常生活についてみると、昔は大家族で台所は一つで食事などは一緒にして暮らしていた。しかし、最近では敷地内でも別棟で生活したり、同一家屋で生活する場合も、食事などは別々にするのが一般的である。結婚後、どちらの家に住むかなどは、最近では妻方とは限らず、相談して決める。

この家の娘は現在、親と同居して暮しており、今後も妻方に居住し女が家を継いでいくナヤールの基本的なシステムは続くであろうと考えていた。

さて、2010年の現地調査の際、ナヤールの文化、著名人、日常生活などについて、ナヤールによって書かれた文書を入手した[12)]。それによれば、ナヤールの結婚では女性の家に男性が通ってくる妻問婚だが、厳しい一夫一婦婚ではなかった。複数の男性が通ってくることもあり、また、男性が通ってこなくなったり、女性の側も通ってくる男性を断るような儀礼があり、男女の関係は必ずしも永続するものでなかった。このようなナヤールの結婚がイギリス植民地の時代には、当時、流行していた進化論的な結婚・家族の発展段階論的にみると、一夫一婦に移行する中途の段階だなどと、批判的に見られていたことが指摘されている[13)]。家・家産は祖母から母へ、そして、娘へと継承される母系制をとるが、実際にはその家の男性が管理・運営などをしている。生まれた子どもの養育について、家に通ってくる父親に養育義務・責任はなく、その家に同居する叔父たちが子育てするという。

2）イスラム教徒の家庭生活

現在のイスラム教徒の家庭生活はどのようであるかについて、若干の検討をする。

コジコーデ（Kozhikode）（旧名カリカット）には現在も海外から来たイスラム教徒が多く住んでいる。この地域の伝統的な建物に住む家庭を２軒訪問した。

一軒は、約400年前に建てられたこの地域でも古い木造建物に住む家庭である。案内してくれた男性は60歳、妻であるこの家の長女が跡継ぎをしている。約80人が居住していたことがあるが、現在は約40人で暮らしている。

先祖はアラブの方から来ており、初代には７人子ども（女５人、男２人）がいた。しかし、男子２人は早死にしたため、女５人は婿取り婚をし、以後、同様に女性が跡継ぎをして現在に至ったと語っている。この家屋には妻方の姉妹も婿取り婚をし、３ファミリーで暮らしている。この家族の子ども２人は男子である。中学生の男子は将来、エンジニアとして湾岸で働くことを希望し、この地域では海外で働くのが当然のようであった。

もう一軒は150年前に建てられた家で、40人が一緒に暮らしていた時代もあるが、現在は約20人で生活している。女性が代々、跡取りをしてきており、現在４代目で

ある（写真８）。

写真８　コジコーデのイスラム教徒の
家庭と暮らし（ケララ　2010）

一世帯（家族）の人々

家庭の室内

この屋敷の玄関から右手には母親方の姉妹の子ども（いとこ）の家族が計10人が暮らしている。左手には、男性57歳、その妻52歳の夫婦と、次女家族と三女家族が同居している。左側の家では、食事や洗たくなど、日中の生活は共同で営んでいる。二層式の洗濯機は昨年、購入した。それまでは裏庭で井戸から水汲みをし洗濯板を利用し、洗濯物を振り回すやり方で洗濯していた。洗濯機を利用するようになり、大変、楽になったことを嬉しそうに話した。

父親の時代にはこの家の皆が男女とも食事は一緒にテーブルを囲んでしていた。今は屋敷で２グループに分かれて食事、洗濯などしているが、共同で助け合いする部分もある。

屋敷内は小さな部屋が並びプライバシーは保持されている。それと同時に、生活を共同する大部屋もある。子育てなどは日常的にサポートしあい、結婚式や祭りなどは一緒にして暮している。

この家の男性たちに婿入り婚について尋ねると、男性は家の外に働きに出かけ不在がちだから、家に留まる女性には婿入り婚は良い。男性も婿たちは助け合い一緒に楽しく暮らせるので良いという。訪問中に湾岸で働いている男性が休暇中で戻ってきたと親を訪問してきた。この男性も他家に婿入り婚をしており、帰国中には妻の家に戻っているという（写真９）。

写真９　他家に婿入りした男性が
実家を訪問中（右端）（ケララ　2010）

最近では仕事があれば、家から一時的に働きに出ていくため、この屋敷は人の出入りが頻繁である。そのため、住人数は流動的である。そして、経済的な余裕ができると、この家を出て別の家に住む傾向が生じている。海外からケララに入ってきた人々が、現在は逆に海外に働きに出かけている状況である。

３）最近の結婚・家族生活の変化

最近の結婚・家族生活の変化について尋ねると、最近の結婚式は夫の家ですることが多くなったという。伝統的なイスラム教徒の婚姻儀礼は花婿と花嫁の父親との間でなされる簡単なものであった。新郎が新婦の父親へ金の贈り物をする。そして、イスラム教徒の牧師の前で登録すれば、結婚式は終わりである。しかし、最近は派手な披露宴をするようになり、以前は結婚式の間、女性は隠れていたが、女性も人前に出るようになった。

訪問した家庭では結婚式の際に分厚い記念アルバムをつくっていることが多く、それを持ってきてはいろいろ教えてくれた。披露宴には1000～2000人もの人々を招待

していた（写真10～11）。

写真10　ムスリムの婚姻儀礼
花婿と花嫁の父親との儀式（タルセリ）

写真11　結婚の記念写真（タルセリ）

結婚後、女性は夫の名字に変わるようになってきた。しかし、結婚後は妻方居住し親と一緒に生活することが多い傾向が続いている。経済的に余裕があれば、伝統的な婿入り婚をし、結婚後の一時期、妻方親族と同居して暮らした後、別居する人々が増加する傾向にある。また、若い人々は海外に働きに出るのが近年、一般的になってきているため、親と同居して暮せなくなっている。そして、若い女性も結婚後、親たちと暮らす結婚を好まず、自分たちだけの生活を好むようになってきている。しかし、親と別居し生活している場合にも、結婚後の親族関係は、妻方親族を優先する傾向がある。たとえば、祭りなど特別な日には妻の家に夫はいるべきと考えられているとのことである。

妻方居住で妻方親族を優先するなど母系制大家族の生活の名残りが見られるが、日常生活においては家族内で核分離する傾向や、実際に核家族化が生じている。結婚式や名字の夫方への改姓については、キリスト教の教育や欧米文化の影響であるのか、父系に移行してきているのである。

女性の日常生活についてみると、一人で買い物など外出でき、顔や姿をベールで隠さずに外出できるなど、パルダはそう厳しくない。しかし、コーチンのような都市部でも、女性がこのような生活・行動ができるようになったのは、約15年前からに過ぎないとのことである。

考察及びまとめ

インドにおいては近年、積極的な教育推進策が実施されている。このような状況下において、イスラム教徒の教育が遅れていること、とりわけムスリム女性の教育が遅れていることが問題視されている。そこで本稿では、インドで教育が最も進んでいるケララ州において、イスラム教徒の女子教育の現状と、女性たちの家庭生活について若干の検討を試みた。

ケララは一般的にはコーチンから南ケララのキリスト教の影響の強い地域というイメージがあるが、北ケララにはイスラム教徒が多く居住し、そして、南よりも教育も遅れ貧しい傾向がある。近年、外国に出稼ぎに行き豊かになる人々も増え、南ケララほど教育熱は過熱してはいないが、徐々に教育の重要性が認識されるようになっている。世代的に尋ねると男女で全く異なり、男性は高年齢から若年層まで高等教育を受けているような家庭であっても、女性が教育を男性と同じように受けられるようになったのは、つい最近のことである。厳しかった「パルダ」も最近では薄れ、女性は日常生活において、一人でベールをかぶらないで外出可能である。

ケララ州の就学率はインド全体でみると高いが、女性は家庭を守るのが大事だという考え方が強く、女性は結婚すると家庭に入るのが一般的である。北ケララでは南より遅れて、近年、女性も学校に通えるようになってきた。しかし、若年層の高等教育を受け専門的な仕事に従事しているムスリム女性も、結婚後は家庭に入るのが一般的である。

マラバールのイスラム教徒はナヤールの結婚・家族生活を模倣してきたとされる。北ケララのイスラムの人々は生活を維持していく上で、緊密な相互の人間関係を維持し、相互援助をする必要があった。ケララでは上の階層のナヤールの結婚・家庭生活、とりわけ母系制の家族生活のあり方は、女性の置かれた文化社会な基盤や土壌は全く異なるが、女性を社会的に隔離するイスラム圏の慣習からみると、それを表面的に取り入れるのは好都合なことであったのであろう。

また、このような結婚・家族のあり方は、インドのダウリー問題を回避する意図も潜んでいる。すなわち、インドではヒンドゥー教徒に限らず女性が嫁入り婚をする際、ダウリーのため、父親は娘に財産分けをしなければならない。反ダウリー法が1981年に制定されたが、ダウリーは依然として大きな社会問題となっている。インドのダウリーは、周辺諸国でも本当に大変な問題だと噂し

ているほどに負担の重いものであるようだ。男児選好もこれが大きな原因とされている。しかし、このようにすれば、一族の土地・財産を分割しないですみ、経済的にメリットがあったのであろう。

最近のグローバル経済の進展、また、インドにおけるIT産業の発達に伴い経済状況が好転するにつれて、人々の生活に余裕ができれば、屋敷内でも世帯（ファミリー）ごとに日常生活において食事などを別々にするとか、伝統的な婚姻儀礼を踏襲しつつも、お金をかけた披露宴をする、結婚後、一時期に妻方同居した後、別居するなど、人々の日常生活や価値観には変化が見られる。

ケララの若い人々の間では、ナヤール式の結婚・家族のあり方ではなく、結婚といえば親とは別居し夫婦のみの新生活を望む動きが生じている。このような動向は日本人が、日本の高度成長期の頃に、「家」や親からの自由・解放を望み、夫婦家族制への移行、核家族化を推進したのと同様な社会変動が起こりつつあるとも見える。

付記

本調査研究は「南アジアにおける女子教育及び女性のライフコースに関する総合的研究」（科学研究費　基盤（B）課題番号　19402041　海外学術調査）の一部として実施したものである。

本調査を実施するにあたり、エバーグリーン・トラベルの真美デービス氏（Ms　Mami Davis）とインドコスモシステム株式会社（Indocosmo Systems Pvt. Ltd.）のデービス・セバスティアン氏（ Mr.　Davis Sebastian）に大変、お世話になりましたほか、貴重な資料を提供して頂きました。ここにこれを記して厚く御礼を申し上げます。

注

(1)　Office of the Registrar General, India　2004　“Census of India 2001　Population Profiles” p.6

(2)　Zoya Hasan & Ritu Menon　2005　“Educating Muslim Girls : A Comparison of Five Indian Cities” Women Unlimited　pp.168－170

(3)　Zoya Hasan & Ritu Menon,　op.cit.,　pp.35－37

(4)　服部範子　2006「変わるウイグル社会と女性の生活変動」 岩崎雅美編　『ウイグル女性の家庭と生活』東方出版　pp.31-58、服部範子　2009「パキスタン・パンジャーブ州における女子教育の現状と課題」 日本家政学会誌』第60巻４号，pp. 371－380

(5)　Office of the Registrar General, India,　op.cit.,　p.70

(6)　服部範子・名須川知子・太田まさこ　2010「インド・ケララ州における教育事情―2009年調査より―」『兵庫教育大学研究紀要』第37巻，pp. 77－89

(7)　A Sreedhara Menon　1987　“Political History of Modern Kerala”　D C Books

(8)　伊藤正二　1978　「近代ケーララにおける宗教・社会改革運動―イーラワー・カーストを中心に―」『思想』No.651　pp.58-76

(9)　Zoya Hasan & Ritu Menon, op.cit.,　pp.134-143

(10)　インドの学校制度は、現在、１－４まで小学校、５－７は中学校、８－10は高校である。最近では、高校でさらに２年間、11－12年、カレッジ・レベルまでの教育を実施するところが出てきている。これは Plus Two と呼ばれる。以前は10クラスで試験があるため、その１/３ぐらいしか進学できなかった。しかし、このようにすると、高校で11－12年の教育が受けられる。

(11)　粟屋利江　「ナーヤル　Nayar」 『南アジアを知る事典』（新訂増補版）　平凡社　p.515，2002

(12)　Usha Chettur　1970 “Nayars” “The Illustrated Weekly of India” 1970. 12. 20, pp.8-28

(13)　粟屋利江　2007「近代ケーララにおける母系制の変容と解体」辛島昇編　『世界歴史大系　南アジア史３　南インド』　山川出版社　pp.280-289